

佐田介石をたずねて

梅林 誠爾

出会い

ふとした出会いであっても、ネットでの出会いには、特に用心しなければならぬ。どのように展開し、どんな結末が待っているか、保証の限りではない。

佐田介石という人を、私はそれまでまったく知らなかった。しかし、一年ほど前、ネット上で古本屋回りをしながら、徳富蘇峰関係の文献を探していると、蘇峰と縁続きの金森通倫の『貯金のすすめ』、従兄の横井時雄の『欧州近世史論』と並んで、佐田介石『鎚地球説略』、佐田介石『仏教創世論』という文字が、ディスプレイに浮かび、目に留まった。それが、佐田介石との出会いであった。

情報集め

「サダカイセキ」と読むらしい、熊本出身の人で、かなり風変わりなお坊さんのようだ、明治維新の文明開化の時代に西洋文明に反対する論陣を張ったそうだ、そんなこと

が分ってくるにつれ、介石の名は私の頭から離れなくなってきました。キリスト教を批判し、文明の象徴ともいうべきランプの使用に反対し、地は決して球ではなく、動いてもいない、動いているのは日と月だと、堂々と主張したという。しかもその天文説を示すカラクリ仕掛けを作り、「視実等象儀」と名付けて、明治十年の内国博覧会に出品している。ますます面白くなってきた。これは、ランプに感動し、将来の文明大国日本を構想し、キリスト教に関心を示した蘇峰とは、まさにその対極に位置する。文明開化の日本にあって、その近代文明を徹底して退けた佐田介石とは、いったいどのような人なのだろう。その言論活動は、どのような意味を持っていたのであろうか。

熊本の繁華街、上通りの古本屋にまで出かけてみた。佐田介石の経済論の名著、『栽培経済論』（明治十一年、十二年）が十四万円の高値で鎮座していた。これには手が出ない。その代わりに、浅野研眞著『明治初年の愛国僧 佐田介石』（東方書院、一九三四年）を、少し割り引いてもらって、千五百円で手に入れることができた。さらに、いつもお世話になっている西村さんをお願いして、ネットに出ている古本屋を数店調べてもらい、大学財政窮乏の折、一番安そうな福岡の店から、佐田介石の『鎚地球説略』（文久三年）、『仏教創世論』（明治十二年）、『視実等象儀詳説』（明治十三年）、『世益新聞』（明治八年二月から九年六月）を取り

寄せてもらった。古くなった味噌か醤油のような臭いがするが、割安であるからと我慢して、和綴じ本や活版印刷の冊子、署名入りの筆写本を開いてみた。県立大学の図書館にも、『明治文化全集 第十六巻 思想篇』に収められた介石の名著『栽培経済論』や、その他の論述が様々な形で所蔵されていた。

それやこれやの文献によれば、佐田介石は、一八一八年（文政元年）肥後国八代郡種山村（現在は、熊本県八代市）浄立寺に生まれ、同国飽田郡小島町（現在は、熊本小島中町）正泉寺佐田氏の養子となり、十八から二十五歳まで京都本願寺の大学林で仏教学を学んでいる。幕末から明治初期にかけて、仏教の宇宙論（須弥山説）に拠りがなら西洋の天文地理学を批判し、江戸期の伝統的な生活文化を擁護する保守的な経済思想を唱え、舶来品排斥運動を展開した。建白書により幕府や新政府に建言し、小冊子や定期刊行物の発行、さらには遊説を通して、全国の民衆に語りかける活動を活発に試み、その遊説中、一八八二年（明治十五年）十二月九日、越後高田に病没している。

正泉寺

まずは、熊本市小島中町の正泉寺と八代市旧種山村の浄立寺を訪ねてみようと思ひ立ち、ふたたび、西村さんの情報処理技術に頼って、正泉寺と浄立寺の所在を、インター

ネットで調べていただいた。正泉寺の住所や詳しい地図は、西村さんの手にかかればたちどころにプリントアウトされて出てくる。しかし、浄立寺が定かでない。いくら調べても、八代市旧種山村地域に浄立寺は見当たらず、現在の八代郡氷川町に浄立寺の名を冠した保育園があると、西村さんは教えてくれた。

八月の末、小島中町の正泉寺を訪ねた。小島中町は、白川の河口近くに位置する。幾つかのお寺が並び、醤油醸造元の老舗や医院、雑貨屋などがあり、歴史のある町という印象である。しかし、古く寂れた町というのではない。その白川河川敷にはグライダー用の滑空場が整備されている。県立大学の学生を始め、熊本地域の学生が、グライダー飛行の練習や競技会を開催し、非常にお世話になってきた町である。

正泉寺には、佐田介石ゆかりの方がお住まいであった。礼儀知らずの突然の来訪者にも、親切にお話をして下さった。正泉寺は介石師が育ち、住職を務めた寺に違いないこと、介石研究者が時おり訪ねてくること、もったいないことに、寺を建替えた時かなりの文献資料を廃棄されたこと、「視実等象儀」は熊本市立博物館に託したが、恐らく錆びついたまま博物館の倉庫に眠っているだろうとのことであった。

浄立寺

介石誕生の地と言われる浄立寺の所在については、私は、かなり混乱してしまった。浅野研眞『明治初年の愛国僧佐田介石』（一九三四年）には、「彼の生れたのは、肥後国八代郡種山村の真宗本願寺派の一寺院浄立寺であった。」とある。だが、奥武則『文明開化と民衆―近代日本精神史断章―』（一九九三年）は、「浄立寺は現在の熊本県八代郡竜北町…に現存する。」と言うだけで、種山村に言及していない。一方は種山村、他方は竜北町と異なっている。浅野氏と奥氏とは、同一の浄立寺を指して語っているのだろうか。

近頃市町村合併が盛んであるが、種山村は付近の幾つかの町村と合併して、まず東陽村となり、その東陽村は、今回の平成の大合併により八代市になっている。竜北町も、和鹿島村などが合併してできた町であり、今回さらに合併して八代郡氷川町になっている。浄立寺の二つの所在地は、明らかに異なっている。しかも、西村さんの調査によれば、八代市旧種山村地域に浄立寺は見当たらず、現在の八代郡氷川町の旧竜北地区に浄立寺の名を冠した保育園があるのみである。

西村さんの調査と一致する昭和二年の記録が見つかった。石川愛郷編『八代郡史』（熊本県教育会八代郡支会、一九二七年）である。その中の八代郡種山村所在の寺院一覧に、

浄立寺の名は出ていない。他方、八代郡和鹿島村（現在は氷川町の一部）所在の寺院一覧には、浄立寺の名がある。既に一九二七年（昭和二年）の時点で、浄立寺は種山村には存在せず、八代郡和鹿島村に同名の寺が存在していたと推測される。その浄立寺について、『八代郡史』は、次のように説明している。

○浄立寺 真宗、西本願寺派

和鹿島村大字島地にあり。天正九年南種山村光林寺開基了道弟、佐伯政之進と云ふもの、剃髪して素閑と号し、当寺を創立せり。享保二年本山の許可を得て、浄立寺と称す。明治十年西南役の際、兵火に罹り同十二年六月当地に移転し、同年七月寺号公称許可せらる。（六二二頁）

これにより、現在氷川町にある浄立寺は、種山村光林寺と深い関係にあることがわかる。その関係については様々な推測が可能であるが、少なくとも時間軸を入れて推測しなければならぬ。浄立寺は、恐らくは、十六世紀末光林寺の一坊として種山村に創建されたのであろう。佐田介石は、一八一八年（文政元年）、種山村に所在した浄立寺に生れた。その後、浄立寺は、明治十年の西南戦争で焼け落ち、明治十二年に八代郡和鹿島村に移転・再建された。そのように推測される。そう考えれば、浅野研眞氏、奥氏、そして西村さんの調査のどれも、間違いではなく、互いに整合

的であるということになる。もちろんこれはあくまで推測であり、その真偽を決するには、これから現地調査が必要である。なお、やはり『八代郡史』によれば、光林寺も西南戦争の兵火に遭い、明治十三年に種山村、杉の本に再建されている。

「佐田介石狷介之士也」

これは、介石の名著『栽培経済論』に、井上毅が寄せた「序」の冒頭の句である。「狷介」とは、「かたいじ」ということらしい。井上毅は、「佐田介石は、「肥後を代表する」もっこすだ」と「賛辞」を贈っているであろう。他方、吉野作造は、「栽培経済論解題」（一九二九年）の中で、介石の経済思想を「珍しい変った説明」と評している。さらに、日本が国際連盟を脱退し、孤立を深めて行く「非常時」を迎えると、「国家主義思想の原初形態ともいふべき意義を認むる」（本庄栄治郎編著『佐田介石 社会経済論』日本評論社、一九四一年）と評価されてくる。反対に戦後民主主義の時代になれば、「介石の思想や舶来品排斥運動は：自由民権運動の一形態として：位置付けられ再評価される」（笠安喜「開化期の伝統主義者たち」一九七九年）ようになる。

このように、「変った説明」とみられ、正反対の評価を受けたたりするのも、肥後もっこすの故であろう。しかし、もっ

こすを讃えるということだけで、終るわけにはいかない。佐田介石が、日本の近代に激しく抵抗するものであればこそ、近代思想を真剣に批判すればするほど、かえってその近代思想に通じる要素、共通の土俵を我がものとしなければならなかったという事情があるように見える。また、他方では、介石が近代批判を徹底すればするほど、日本近代に対して近世江戸を対置する保守主義であるように見えながら、特殊日本的な近代が見落としてきたものを指し示し、近代日本を超えて、現代の私たちが抱える課題を提示しているようにも思えるのである。こうした事情が、また日本の近代の評価とも関って、佐田介石についてのさまざまな評価を生んできたのであろう。

等象齋

佐田介石は、幼名を觀靈、字は斷識、号を等象齋と称した（浅野研眞著『明治初年の愛国僧 佐田介石』。「等象齋」は、もちろん介石の天文儀「視実等象儀」の「等象」である。その「等象」を号として自ら好んで用いたということは、「視実等象」という考えに寄せる介石の熱意と自信の程を示している。実際、介石の天文地理学は、西洋近代の地動説や地球説を退ける議論と、仏教の須弥山説に拠りながら自らの宇宙観を提示する議論とから成るが、「視象」と「実象」、そして視実の「等象」は、その両方の議論、とり

わけ後者の自説展開の基本概念になっている。

介石が、「視実等象」という考えを使いながら、どのように近代科学と対決しているかを、見てみよう。『鎚地球説略』（文久三年）は、介石がその天文地理説について著した最も早い論述である。このタイトルを、おだやかな形に言い換えれば、「『地球説略』批判」となる。その『地球説略』は、中国在住の米国人牧師R・Q・ウェイ（中国名、禔理哲）が、中国の儒者の協力を得て、西洋近代の天文地理学を漢文で紹介した冊子である。中国の寧波で一八五六年に出版されている。それが日本に伝わり、訓点や訳解を施されて広く読まれ、維新後小学校教科書にも採用されている。またもや西村さんをお願いして、ネット上の古本屋から、禔理哲著・箕作阮甫訓点『地球説略』（万延元年、一八六〇年刊）を取り寄せることができた。東半球、西半球をそれぞれ一葉に画き、世界の各地域の民族の衣装、動物たち、建物などの挿絵があり、楽しい本である。介石は、箕作阮甫訓点『地球説略』の「地球円體説」と「地球輪轉説」の二節をほぼ逐条的に批判している。介石はさらに、中国在住英国人宣教師B・ホブソン（中国名、合信）が著した科学啓蒙書『博物新編』にも言及している。

R・Q・ウェイは、地が球であることの証拠の一つとして、沖へと去り行く船を陸から見送るとき、最初船体、帆柱、旗の全てが見えているが、しばらくするとまず船体が見え

なくなり、次に帆柱が見えなくなり、最後に先端の旗が消えてしまうといったこと、また沖からやってくる船を千里鏡でのぞくと、旗が先に見え、次に帆柱、最後に船体が姿を見せるということ挙げている（『地球説略』一丁）。

それに対して、介石は、まず視象（見かけの姿）と実象（実の姿）との区別を指摘する。

ソレ天文地理ノ二ツニ於テ視象ト実象トノ二ツアルコトヲ知ルベシ。ソノ視象トハ人目ノ視成スコトニテ、実体アリノマ、ヒラカタニ合ハザルコトナリ。喩ヘバ京都ノ大火ヲ大阪ヨリハ平瀉ヒラカタ「枚方」ト視成シ、平瀉ヨリハ伏見ト視成スガ如シ。ソノ実象トハ有ノマ、ニ見ルコトニテ、京都ノ大火ヲ京都ニ居テ見ルガ如シ。

（『鎚地球説略』四十七〜八丁）

介石も、航行する船の視象（見かけの姿）としては、R・Q・ウェイが言う通りであることを認める。しかし、実象（実の姿）としては、船は球状の海面を航行しているのではなく、あくまで平らな海面を航行していると、譲らない。最後に、われわれは、平らな海面を航行している船の実の姿を、なぜウェイが言う通りの視象（見かけの姿）として観測してしまうのか、その理由、いわば観測の法則を、介石は指摘する。それは簡単なもので、「ソノ実ハ高低ナケレドモ遠近ノ別ニヨリテ高低アルガ如ク視成スコトアリ。」ということである。つまり、船体も帆柱も旗も、航行と共にそ

の位置を高から低へと（あるいは逆に）変えているのではなく、近くにあるときは高く見え、遠くにあるときは低く見えているだけである。そして、船体が最も低いので、先に見えなくなり、旗は最も高いから最後に見えなくなるのだと、いうのである。このように、航行する船の見かけの視象が平らな海面を航行する船という実象と一致するといふことが、「視実等象」である。その「等象」の根拠を、（簡単に粗雑ではあるが）人間が自然現象をいかに見ているか、観測の法則が与える。観測の法則は、いわば「視実等象」の法則である。

地動説を退けて、仏教の須弥山説に基づく天文説を主張する場合も、介石は同様の議論をしている。天の視象（見かけの姿）とその実象（実の姿）とを区別し、平な天を日月が運動する姿を実象と見なしつつ、観測の法則を特定して、その実象に視象が法則的に対応するということにより、須弥山説に基づく天動説モデルこそが天の姿であると説く。「視象ニ合フハ是レ天動ノ説ナリ。地動ノ説ハ挙テ論スルニ足ラズ」（『鎚地球説略』五十一丁）。

「視象」と「実象」、その「等（一致）」という認識論的、方法論的概念は、明らかに西洋の近代科学のものである。そのことに、介石自身が、触れている。

コノ視実ノ事ハ、汝力家ニモ平日事事ニ用ルコトニテ、地動ニ於テ視動実動ト言ヒ、日径ニ於テ視径実径

ト言ヒ、日行ニ於テ視行実行トイヒ、地平ニ於テ正地平視地平ト言ヒ乍ラ、コノ視高低実高低ナドヲ失ルハ、俗ニ所謂猿モ木カラ落ルノ類乎。コノ視実ノ二ハ天学者須臾モ忘ルベカラズ（五十一丁）。

ところで、介石は、この視実の二が西洋近代科学の概念でもあることを、どのようにして知ったのであろうか。私は、それは、蘭学の名著、志筑忠雄の『暦象新書』からではないかと推測している。その理由の一つは、介石は『鎚地球説略』二十一丁で、『暦象新書』の具体的な内容に言及しており、『暦象新書』を読んでいると推測されるからである。さらに、もう一つの理由は、「視」と「実」は、『暦象新書』の基本概念であって、介石がここに挙げている「視動」「実動」、「視径」「実径」、「視行」「実行」などは、すべてこの通りの言葉で、『暦象新書』に出ているからである。

『暦象新書』のもとに書は、ニュートン力学をヨーロッパに広めたオックスフォード大学のケイル John Keil（一六七一〜一七二二）のラテン語の著述 (Introductiones ad veram Physicam et veram Astronomiam, 1725) である。それを、ルロフス Johan Lulofs がオランダ語に訳し (Inleiding tot de ware Natuur-en Sterrekunde, 1741) そのオランダ語訳を、長崎の通詞にして蘭学者の志筑忠雄（一七六〇〜一八〇六）が、一七九八年から一八〇二年までの五年間をかけて訳解し、まとめた大著である。『暦象新書』は写本の形で伝えら

れており、国立天文台図書室などに所蔵されている。三枝博音編『日本哲学思想全書6 自然編』にも収められている。

このように、介石は、西洋近代科学を徹底的に批判し、地は平で、動いていないと、近代科学と相容れない意見を主張しながら、近代科学の啓蒙書や専門書の中へと分け入っている。そして、西洋近代科学の方法論的、認識論的概念を駆使しながらそれを批判し、さらに自らの称号としても使っていたのである。介石の思想は、反近代でありながら、それでも近代思想の一つであると言いうことができよう。

しかし、残念なことに、介石には限界があった。西洋近代科学の中へ分け入るといっても、日本語と漢語によって可能な範囲に限られた。介石は、西洋から来た科学者との論争を試みたが、英語、蘭語などを解することができず、もどかしい思いをしている（佐田介石「外国一等天師二疑問スルノ事」『世益新聞』第四号付録、明治七年）。

消費と生産

佐田介石は、（明治七年の）「建白」（本庄栄治郎編著『佐田介石 社会経済論』日本評論社、一九四一年所収）や『栽培経済論』において、その舶来品排斥運動の基礎となる経済思想を説いている。「国を富ますの道は、消費の法を広くするに如くはなし。消費の法狭ければ、随て製造の道も狭

くて塞がり、消費の道を広くすれば、制作の道も亦随て広く通ず」。製造すなわち生産ではなく、消費こそ経済の要であるということが、介石の経済思想の主旨である。とりわけ日本にとっては、国産品の消費を盛んにすることが富国の必須要件であるとする（「建白」『佐田介石 社会経済論』一〇〇～二頁）。

吉野作造「栽培経済論解題」は、介石の経済思想を、「彼の経済説は彼自身の頭の中に孤立して存在した丈のもの」と評している。しかし、介石の経済思想についても、天文学地理論の場合と同じように、明治維新前後の他の経済思想と比較し、やはり共通の土俵を見なければならぬと思う。

その共通の土俵とは、生産と消費の関係こそ経済の要であるという視点である。生産と消費の関係については、福沢諭吉『文明論の概略』や徳富蘇峰『将来之日本』も論じている。士農工商という封建的な身分制度の是非とも関つて、当時の重大な論争テーマであった。福沢諭吉は、生産が消費をもたらす、消費が生産をもたらすという生産と消費のリズムに注目する。そして、専ら生産活動に従事する農工商と専ら消費生活を享受する士というように、生産と消費とを異なる階級、階層に割り当ててきた封建制度は、社会のあるべきリズムを壊してきたと断じている（岩波文庫版二四七～二六一頁）。

介石の消費主義の経済思想は、もちろん、専ら消費生活

を享受する士の立場を擁護する保守的な考えである。福沢諭吉の主張の方が正当であると私も考える。しかし、今日からふり返って見れば、福沢諭吉や徳富蘇峰が目指した近代産業化社会は、結局は生産主義に走り、人々の消費生活を、まったく顧慮しないか、せいぜい経済の二次的な側面としてしか扱ってこなかったのではないだろうか。消費は生産を可能にするから経済的価値があるという側面だけを見て、消費それ自体に価値があるという面を見てこなかったように思うのである。生産主義の経済が崩壊した今日においては、介石の消費主義の経済思想にも見るべきものがあるように思われるのである。

暮らし

消費それ自体に価値があるとは、人々の暮らしそれ自体に価値があるということである。幕末から明治初期において、日本社会が体験したものは、異なる文明との出会いである。その出会いにより、人々の暮らしが変化し、暮らしが営まれる世界が変化する。それは、民衆一人一人に、ものの考え方だけでなく、その生きる空間、時間の変更を迫る根本的な変革であった。そうした根本的な変革を前にして、文明開化の路線によっては暮らしが立ち行かず、没落を余儀なくされ、近代化の別の道を見出す力もなく、近代化への抵抗という形で、この改革に関らざるを得なかった

人々が、多く存在した。

佐田介石が問題にしたのは、そうした人々の思いであり、暮らしである。舶来の工業製品により駆逐されていく日本の一次産品の生産農民や商人、石油ランプにより圧迫されてゆく種油燈火、就学を義務付けられながら子供の教育費を捻出できない農民、鉄道敷設のため住み慣れた田畑や家を失う人々、蒸気船航路開通により廃れ行く街道筋の人々、家禄を失ない、帰農・帰商に失敗してゆく士族、廃仏毀釈と近代科学による仏教の大難に遭遇する僧侶、そして伝統的年中行事や祝祭が改暦により廃れてゆくことを憂える人々（「建白」参照）。

これらの問題において人々が迫られていたのは、生活の時間の変更であつたと見ることもできる。介石も、それと意識せずに、そのことに触れている。舶来の工業製品の生産は人為のリズムによっていくらかでも制御可能だが、農業など日本の一次産品は春夏秋冬の自然のリズムに従わなければならぬ。就学の義務付けは、子どもたちが何歳で幼年・少年期を終え、職業を見つけ大人となるか、ライフ・サイクルの変更を強制する。鉄道敷設や蒸気船航路の開通は、旅行と通信、運輸の時間・空間秩序の変化をもたらす。士族が家禄を失い、勤労者となるということは、生産と消費の経済のリズムを担う普通の人間になるということである。そして、明治五年の改暦は、西洋に開かれた新たな時

間秩序の導入である。介石の思想運動は、日本の近代化が、民衆一人一人の暮らしぶりの変化、その生きる時間の変化でもあったことを物語っており、近代化が見落とし、忘れてしまった暮らしの大切さを、示しているように思われる。

ネットでの出会いから始まった私の介石探訪は、まだほんの入り口である。上には触れなかったが、介石を明治初期の日本仏教の教学運動史の中に位置づける谷川穰氏の研究など、様々な介石研究が進められている。そうした先行研究にも学びながら、探訪をさらに続けて行きたい。その際、これまで述べてきたように、私は、佐田介石を、文明開化批判の強力な論客ではあるが、やはり日本近代の思想家の一人として位置づける必要があると思う。そのことによつて、日本近代思想の豊かさ、熊本の近代思想の豊かさが明らかになってくるように思うのである。

これまでの介石探訪において、正泉寺の佐田様、本学文学部の米谷助教授、学長秘書室の西村靖代さん、文学部総文資料室の藤本奈央さん、さらに国立天文台の方々など、たくさんの方にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

追記

校正刷りが届く前の一月九日、八代郡氷川町の竜北郷土歴史資料館、同町竜北地区の浄立寺、八代市旧南種山村の光林寺を、何かと注文の多い妻と二人で訪ねた。資料館では、竜北村史編纂委員会編『竜北町史』（昭和四八年四月）を拝見させていただいた。そこには、明治十二年六月十日付けで、浄立寺の廣志呑海、大音、真月の三代連名の（本山宛と思われる）上鹿島村への寺基移転の願書の一部が転載されていた（『八代郡史』の「八代郡全図」によれば、「鹿島」は和鹿島村の大字の一つ）。ただし、移転の理由は鹿島村信徒からの招請となっており、西南戦争への言及がなかった。

浄立寺では、廣志家の方々から、介石師の父母、廣志慈博、マチ以来の系図を説明していただき、浄立寺が介石の実家に違いなことを確認できた。また、上の寺基移転の願書を出した廣志呑海が、介石のめいの婿であることも確認できた。

光林寺では、かつて浄立寺が、西迎寺、養安寺などとともに、光林寺の寺内にあったこと、若い介石が勉学修行した祠が近くにあること、光林寺も浄立寺も、西南戦争で近くに野営していた官軍の手によつて焼き払われたことなどを教えていただいた。

竜北郷土歴史資料館、浄立寺、光林寺の方々には、厚く御礼申し上げます。